週刊新聞
直言

露國革命の教訓

（一）

露國革命運動の由來は頗る古い [illegible]

而し [illegible] 一八六一年 [illegible] の一事である [illegible]

不平 [illegible] 一時に露國全土 [illegible] 農民一 [illegible] 革命黨 [illegible] より多數農 [illegible] 為めであつた

（二）

[illegible] 生活の苦痛の半面は、都會に於ける [illegible] 教育の普及と智識の進歩 [illegible] 不平を激成するには必然の結果である、[illegible] 注意すべきは當時の女子教育の [illegible] である

[illegible]

青年男女が西歐文明の學術智識を抱いて野蠻なる自國の腐敗社會の状態に接した時には、彼等は革命黨とならざるを得なかつた、殊に [illegible] 婦女の多數が [illegible] 專制束縛と無智蒙昧の境涯 [illegible] 発れ [illegible] ると同時に、一躍して革命黨に投じたのは無理ならぬ次第である、そして是等數千の青年男女が「人民の中に行け」てふ大運動、大傳道の結果は、即ち一八七三四年にかけての大捕縛となり、此大捕縛の反動は「民意黨」の暗殺手段となつた

[illegible]

殊に今日猶は人心を感奮せしむるのは、ソフィア●ペロブスカヤ女史の事跡であ [illegible]

如此にして政府と革命黨間の激烈なる戰鬪、政府は警察力を以てし革命黨は暗殺を以てするの結果、一八六二年より一八 [illegible] 年に至る間、政治上の犯罪で西比利 [illegible] に流された男女は一萬七千人の多きに達した、而して革命思想なるものは到底根絶し得なかつたのである

（三）

[illegible] 複雜なる破壞運動と、個人的の [illegible] 段は其後、昔日の如くにならないが、夫れ革命運動の消滅ではなくて運動が巧妙になつたのだ、

[illegible]

一八九八年第一回の大會に於て左の如く決議した

武力手段に關しては、[illegible]

此黨派は今や露國各地に於て三十九の支部と十一派の團體とを有して居る、右社會民主黨の外に、近年社會革命黨なる一派が出來た、其主義別に前者と異る所はないが、唯だ其實行手段を異にする

[illegible]

其結果として革命社會黨中の一部は新たに戰鬪團なる者を組織し、其幹部の決議に依て暗殺の實行に取掛つた

[illegible]

而して昨年世界を驚かしたる內相プレーヴェの暗殺の如きも、實に彼等の計畫に成つたのである

[illegible]

[illegible] 其年々數萬部の小冊子檄文引札様の物を配分して居る

現在「革命社會黨」は二十六の團體と十六の支部を露國各要地に置き、一昨年の春には紐育にも支部を置いた、機關には「革命露西亞」其他二三の雜誌を發行し、

[illegible]

今回の革命運動には、諸種の分子が加はつて居るには違ひないが、此氣運を醸成し、又其重なるパートを働いて居るのは實に右の「社會民主勞働黨」と「革命社會黨」の二派である

（四）

以上述べ來つた革命運動の歴史は吾人に如何なる教訓を與ふるであらう乎

[illegible]

殊に驚く可きは警察力の無効なると

[illegible]

若し露國政府にして、今少しく人權を重んじ、自由を重んずるの心あつて、早く十年二十年の前に憲法を與へ議會を起して、民衆の不平を放散するの機を有せしめば、斯る忌むべく恐るべき血腥さ歴史を染成すには至らなかつたであらう、吾人は露國革命の史を讀む毎に、深く自ら戒め且つ自ら [illegible] 所以の者多きを感ずるのである

THE CHOKUGEN.
(meaning 'speaking straight-forwardly.')
SOLE ORGAN OF JAPANESE SOCIALISTS.
Issued every Sunday.
Communications addressed to The Heiminsha, Yurakucho, Tokyo.

Vol. II.—No. 3. Tokyo, February 19th, 1905.

CHRISTIANITY AND STATE.

If in religion ever assumed any temporal power it always did so in the form of a state religion. Such invariably was the case with the Christianity in the European states, as well as the Buddhism in Japan. Apparently the religion in such condition is quite imposing, but at the same time it must be acknowledged that the spiritual inconsistency and submission among the religion to be fast decaying in the core. Till recently the Christianity in Japan was put under a strong governmental oppression on account of its anti-state principle. Hereupon the Christianity—Christianity of all denominations—has tried every effort to join the good will of the government, not even doing much for its dignity. And the Congregational Church, which is most independent with the Missionary Societies as far as the finance is concerned, has assumed a free attitude in order to go with the national idea hand in hand. As a matter of fact, at the general conference of the Church last winter the resolution of "Evangelisation of the Orient," "The Dignity of State," etc. were passed, and these ideas can be nothing more than the "Peace of the Orient," "Expansion of State," etc, the political ideas so prevalent nowadays.

The spirit of the Congregational Church is however most distinctly expressed by the Rev. Danjo Ebina, who boldly but most solemnly declared, in his journal, "Shin Jin," "Japan as the national incarnation of the word of God which is the only temple of the world." If it is really so, we wonder what nice explanations this most loyal Reverend may offer with regard to the God of the Christianity and Sovereign of Japan. And we see there is little difference between the hereditary ambitions of the Russian court and the honest aspirations of this good old Reverend.

Dear Comrades:—

I have made my first socialist speach—the first speach of any kind I ever made in my life before the members of Social Democratic Club of Boston the last Sunday, Jan. 15th. My subject was "Misrepresented Japan" in which I have tried to describe the true condition of our country today, criticising or rather condemning the false interpretations made by those who are regular flatterers and so-called professional patriots. While my lecture was, in most part, so dry with plenty of figures and facts for the audience I was listened attentively—often with claps—from begining to end. It was said that the crowd was the largest one they ever had. After the speach, there were many questions as well as impressions to which I had to answer or to say thanks. Hoping you are ever doing good work for the cause.

1—21—05.

Fraternally Yours:—

K. Kaneko.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

内外時事

○萬朝報の富豪攻撃　萬朝報は近來頻りに富豪攻撃の態度を示せり、最近の同紙より左の二項を抄録す

△貴族富豪の横暴　來る三十九年度より實施の筈なる市街宅地價修正の件に付、貴族院議員は申すまでも無く、其他の富豪華族等一般に政府を非難し、愈よ修正實行に際しても政府が豫期せる如く實質價格な時價相應に高く見積ることを許さず、政府をしてホンの申譯的に貴族等の迷惑せざる程度に於て修正を行はしめんと欲し、既に是れまで數ば當局者に突込みて大に之を苦め、政府も頗る閉口し、如何にして彼等の感情を融和せんかと苦慮一方ならずと云ふ

△眞心なき地主　非常特別税の市街宅地租增徵を機として不正の奇利を博せんとする奸黠の地主と、借地人借家人に之を負擔せしめて體のよき脱税を爲さんとする狡猾なる地主との生きたる例は去る八日に掲げしが該記事は意外の反響を生じて眞心なき地主等を責めたる投書机上に堆くなれるは我等の私かに快心の事となす處なり

麻布飯倉町六の十三居住	子爵 稻葉順道
同區同町六の十四	侯爵 德川茂承
芝區葺手町廿四	伯爵 大木達吉
荏原郡大井村二四八	伯爵 伊達宗基
日本橋區檜物町十四	川崎銀行
芝區田町八の一	伯爵 柳澤保惠
同區高輪南町廿七	公爵 毛利元昭
日本橋區新右衛門町	三井銀行部
京橋區南傳馬町三の十五仙女香	坂本友七
芝區伊皿子町六十五	堀越角次郎
同區白金猿町五十三	岡見清致
同區新堀町三十九	杉井勝太郎
日本橋區本材木町一の七	渡邊治右衛門

以上の者どもは芝區内に於ける有數の地主なるが、何れも三月下旬頃を期して急に四割前後引上ぐべき審議を凝らし居れり、己が豪奢を極むる邸宅は山林の地目に隱して脱税をしつゝ、傍ら戰時税をさへ免れんとするは忍し難き不埒と謂ふべし

△腐れ緣、腐れ緣　三十四、五兩年度に於て姦邪私曲の迹ありたること顯然たる大倉組に對し、政府が最近に於て更に請負を爲さしめたる事項の數、左の如し

三十六年度に於て		
近衛師團にて	動員の際 指定	一
第一師團にて	同上 同上	一
第五師團にて	指名競爭	一
三十七年度に於て		
第一師團にて	指名競爭	一
第三師團にて	同上	一
第四師團にて	同上	一
第十一師團にて	指定	二
	指名競爭	二
檢疫部にて	指定	一
以上兩年度の合計	指定	五
	指名競爭	六

政府者自から懲りる所を知らざるも亦甚しからずや

吾人は萬朝報が永く我が平民の爲に此態度を取らんことを切望す

○沖繩の旱魃　沖繩縣にては昨年三月以來殆んど適順の降雨なく、井水及び溜池の沽渇を來し、樹木枯死し、水田龜裂し人民の常職たる甘藷及び主要なる收入の源たる甘蔗共に生育せず

△目下饑饉に迫れる窮民實に一萬三千八百餘人あり而して其食物を聞くに、實に左の如き慘狀を極む

△(一)芋粕二合にマツハー(海藻)四斤を混じ五人分一回の食料とし△(二)小米一合に芋の枯葉三斤を混じ三人分一回の食料とし△(三)小米一合五勺に海のアーサーと稱するもの四斤を混じ四人分一回の食料と爲す者あり△其他平素肥料のみに使用するタカモー(海藻)又は家畜の飼料たる蔀皮、豆皮等を粉末とし芋粕に混じ潮水を以て煮沸し食料に供するものあり△其最も甚しきに至りては芋粕小米等の混合なく單に蘇鐵の幹を乾燥せるものを其儘煮て食料となせるものあり

猶聞く所に依れば、同地は古來旱害多き土地柄にして、永寶六年、文政六年、天保元年の三回に餓死者各數千人を出だしたるの記錄あり、今回は今や餓死者を見ずと云ふと雖も、爲政者は罪を天災にのみ歸して、人を殺すの責を免るべきに非ず英國人は印度の饑饉を以て天災に歸すと雖も、其の眞の原因が英國の惡政に在る事は既に識者の指摘せる所ならずや

○自殺又自殺　自殺又自殺、日々の新聞紙上、何ぞ自殺者の頻々として相次ぐや

▲日本橋區人松町の吳服店猪川戸次郎(二六)は多額の負債ありて日々督促せらるゝ苦しさに堪かね其妻おすゑ(二二)と共に大森の鐵道線路にて轢死したり(十四日)

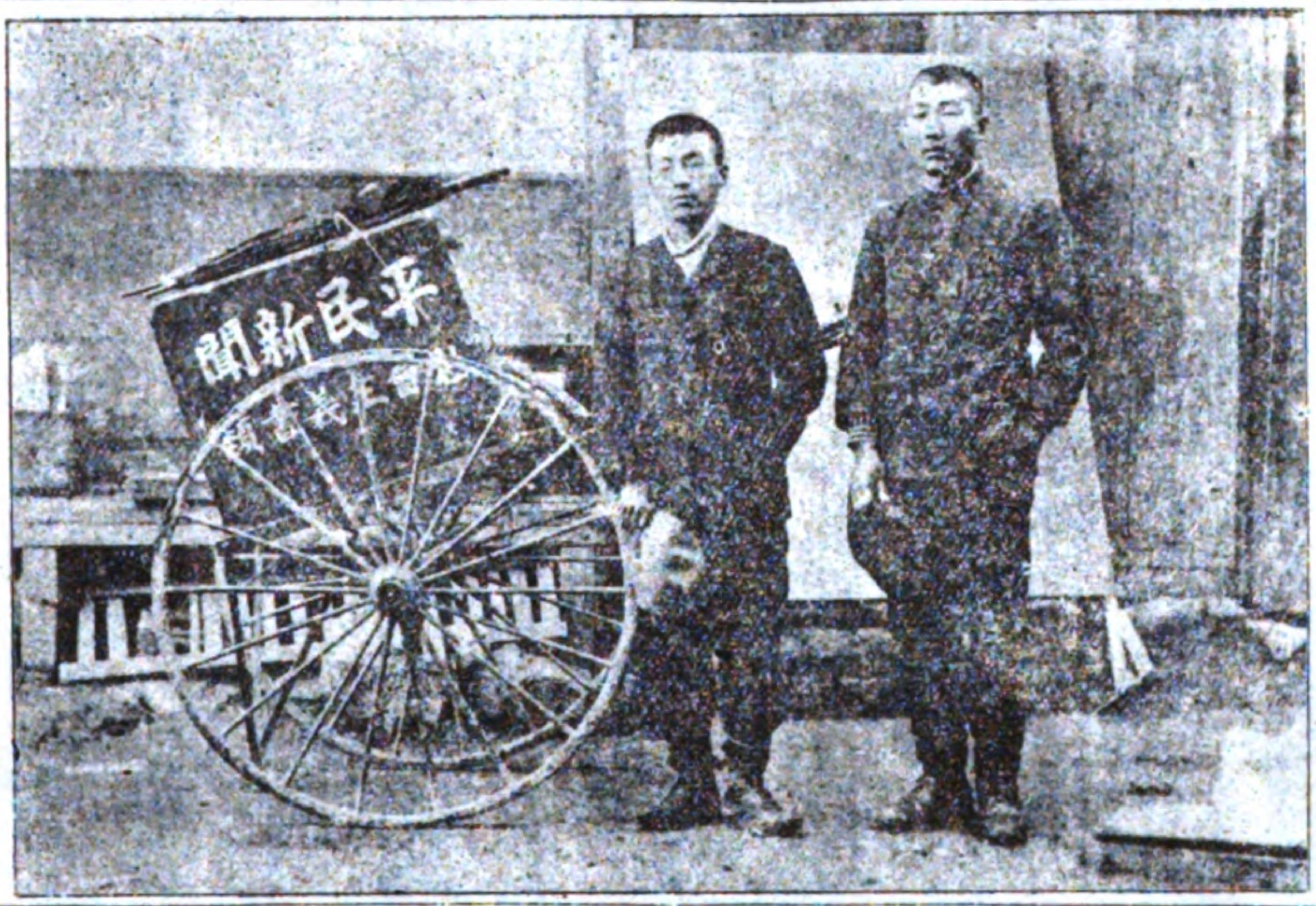
▲本所押上町横山もと(三〇)は眞人幸太郎が去年出征したる後、五歳の男子と去年生れの赤兒を抱へて糊口に窮し、遂に自宅の二階にて赤兒を懷に抱きし儘縊死し居たり(十四日)

▲横須賀の藝妓屋高橋の物干にて縊死を遂げ居る男あるを發見したり右は同家の藝妓某の養父川崎文次郎なる老人にて元は相應に暮せしも不幸續きにて零落し厄介となり居たるものなり(十二日)

▲去七日午前三時尾の道を發せし上り列車中にて陸軍大尉野上藤次郎(卅二)なる人日本刀にて自殺を企てしが急所を外れて助かりたり

▲市ヶ谷田町の瓦職熊澤作次郎(四九)は厭世の結果自宅にて縊死したり(十二日)

所謂精力主義の成功者等は、是等の自殺者を觀て、自業自得のみと嘲笑せん、而も知れ是等の自殺者も亦た國民の一人也、戰勝の光榮赫々たる文明國、君子國の一人也、天皇陛下の赤子の一人也



●寫眞の説明

△右は山口義三君、左は小田頼造君である、兩君が百十四の日數を費して、約三百里に渡る長程を踏破し、以て主義の傳道に盡されし偉績は、吾人の永く忘るゝ能はざる所である

△山口君も瘠せたが、小田君の方は元、肥へて居つた丈けに瘠せ方が一層著しく目立つて見える、然し、永き戰ひに瘦せは瘦せても、兩君も愈々男らしくなつた△吾人は我黨青年の中より、兩君の例に習ふ者の續出せんことを祈る、衣食のことに思ひ煩ふ勿れ、野の花をも空の鳥をも神は空しく殺さぬではない乎(白鯨生)

○銀行者と第四回債券　第四回債券は遠からず募集されんとす、政府は例に依て銀行者に相談を持かけたり、銀行者は例に依て其條件に慾張り居れり

第一銀行の澁澤榮一、三菱銀行の豐川良平、横濱正金銀行の相馬永胤、第百銀行の池田謙三、十五銀行の園田孝吉、興業銀行の添田壽一、安田銀行の安田善次郎、三井銀行の早川千吉郎、帝國商業銀行の馬越恭平等の諸氏は去十四日正午より日本橋區坂本町銀行俱樂部に於て晝餐を共にし第四回國庫債券募集に關し銀行側の態度を一定し置かん爲め種々凝議する所ありし二時半頃散會せしが其會議の内容は固く秘密に附し右會合者の外には一切洩さゞることに爲し居れり

秘密々々、彼等紳士閥は常に秘密を有す、階級的秘密、私利的秘密を有す、多數平民は常に此秘密の爲めに驅使せらるゝ也

○騙取と僞造　此週間の日刊新聞をして二號活字を用ゐしめたる騙取と僞造との二事件あり

△日本鐵道會社の庶務課書記中村清一といふ者、白河停車場敷地買收の事を委任せられ、岩淵某より實價千五百五十圓にて之を買受け、會社に對しては千八百十圓にて買受けたりと稱し、讓渡證を僞造して七百五十圓を騙取したり、而して庶務課に於ては之を告發するは醜なりとして其處分協議中なりと

△京都府愛宕郡田中村の井村時太郎といふ者、其の弟と共謀して五圓及十圓の紙幣を僞造し、處々に藝妓を弄びて豪奢の生活を爲し居りしが、終に去日東京に於て捕縛せられたり

此二人は共に當代の紳士なり、會社員と稱し、實業家と稱し、腕利を以て目せられ、働き者を以て任ずる者、皆此徒の亞流也、而して是れ今の紳士閥に當然附隨するの現象也

○學生の同盟休校　近時の尤も苦々しきは各地學生の同盟騷ぎ也

▲埼玉縣師範學校生徒は、去十日は宣戰詔勅の喚發されたる當日なりしかば打集ひて戰捷を祝せんが爲め一日休校の許可を得たしと申出でたるに舍監等は日は紀元節にて休日の事にもあれば十一日にしたる方宜からんと說諭せしに彼等は大に激昂し全校百數十名の生徒打擧て同盟休校したるのみか種々の暴行を働きたるより職員は取敢へず一同に停學を命じ目下夫々取調中なり

▲熊谷中學校四年生十餘名は去十四日歸宅願を出して外出し一同退學に決したり

吾人は同盟騷ぎの近因に就て是非するの暇を有せず、唯だ今の倫理教育なる者が幾何の功果を奏し居れるやを知るに於て餘師あるを感ずるのみ

○浦賀同盟罷工の落着　浦賀船渠會社職工三百名が增給を請求して同盟罷工せし由は前號に記せしが、右に付き社長及び重役等は匆惶東京より出張して種々慰撫する所あり、結局穩に就業する者には年度替り即ち來四月より相當の增給すべしとの條件の下に一先づ落着し過半就業するに至れり

○清國學生と日本警察　近時支那留學生の集會ある毎に、日本の警察官は親しく其會場に臨み、時には其集會の解散をすら迫ることありと傳ふ、あれ程邦人の集會の自由に干涉して飽きながら、まだ干涉が仕足らぬと見ゆ、左れどマサか我警察が淸國政府の御用を勤むる譯にはあるまじ

○人力車賃銀均一　曾て記せる如く東京市人力車組合中重なるもの數名は今回資本金一萬圓を投じ合資會社を組織し車賃均一制を取らんとて運動中なるが其割合は一區内五錢、半日雇上げ四十錢、一日雇上げ八十錢と規定し其筋の認可を得んとせり

○徵兵を忌避して傷く　横濱平沼町宮田正次は徵兵適齡にて入營に決せしを忌み自ら一本の指を切斷せし爲め重禁錮三ヶ月に處せられたり、三年の徵兵は三ヶ月の懲役となる、彼れ悔るや否や

○名士と海軍省　嵯峨の屋主人矢崎鎭四郎氏は先頃三十五圓の月給で海軍省の雇となれり、曩きに登崎春之助も亦入りて同省に在り、文壇、講壇の諸名士も生活の爲めには亦五斗米に屈せざる可らず

●大審院公判

平民新聞五十二號被告事件に對する上告審公判は、豫報の如く去る十六日午前大審院第一公廷に開かれたり、今村、卜部、花井、鵜澤等の諸辯護士出廷して辯護の勞を執らる、其辯論の趣旨は本紙前々號所載の上告趣意書を敷衍せるものなれば略す、判決は來る廿三日を以て言渡さるゝ筈なり

●幸德西川兩氏送別會の禁止

幸德、西川の兩氏が我が社會主義運動の犧牲となりて將に獄に入らんとして居らるゝに就き、前號廣告の如き送別會を開かうとした、處が十四日に至り、發起者の一人石川氏に突然麴町警察署の召喚に接した、而して此會が治安警察法違反なりと言渡された、署長は敢て禁止を命ずとは言はなんだ、甚だ解し難き事ではあつたが、何分にもお上のお沙汰の事ゆゑ、恐れ入つて送別會を止めにした(發起者の一人)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●矛盾の世の中

（十三日青年會館に於る演說の草案）

旭山生

社會の發達には二つの方面がある、一は外延的方面で、社會組織が廣く且く複雜になり行くのを言ひ、一は內包的方面で社會組織が固く且つ精密になり行くのを言ふ、然るに今の社會の實際を見るに、此の外延的方面には甚だ發達して居る樣であるが、內包的方面に於ては却て退步するの形勢がある、即ち社會組織が廣大になるに係はらず、其內面に於ては甚だしく矛盾と衝突とを見るのである、少しく例を引いて說明しやう

◎第一は經濟上の例　である

△近來交通發達の結果、往復が甚だ便利になりて、日用品の注文までを遠方の商人に申込む樣になつた、其處で深川の米屋が赤阪に行き、四谷の米屋が本所に行き、商人の往來の路筋を圖に書けば、實に蜘蛛の網よりも入り込んで居る、

△又た品川の資本家が下谷の方に普請するには、其品川邊から材木を送り大工を連れて行き、淺草の人が芝に普請するにも、亦た淺草から芝まで材料と大工を運ぶといふ仕組になつて居る、

△個人の利益を目的とし、個人の經營に依て行はれる事業が右の如き有樣になるのは當然のとで、交通機關は此の如く不經濟に使用され、勞力や時間は此の如くに濫費され、而して競爭は愈々烈しく、遂には何れか敗れ、又は共倒れに終るのである、そして之が便利な世の中だと言はれるのである、

△モ一つ矛盾なる事例を引いて證く、東京市中には多くの貧民窟がある、何時も例に引くとだが、其處には三疊の間に家族七八人といふ程の一家がある、モツト甚しいのを見れば即ち宿無しで、此寒い一夜を他人の家の軒下や、塵溜の中で明かすものもある、其處がスグ其近所に於て幾つも幾つも空家がある、そして人の住はんとを待つて居るのだ、又た更らに他方を見ると多くの大工が家を造るべく其業を求め居るのがある、

△空家は徒らに雨に洒されて朽ちつゝあり、無宿者は寒さに凍えて死につゝあり、而して大工も饑えて死に近きつゝある、あゝ是れ何たる悲慘なる對照であろう、社會に若し一點の慈悲心があれば、此空家に此無宿者を収容せずには居られぬ譯、又た大工に失業させて苦しめずに、ドシ／＼家を建てゝ人を住はせたら宜いでは無いか

◎第二は政治上の例　である

△議會は人民の代表機關であるといふが、其機關のなす處はドゥであるか、彼の毎年毎年問題になる工場法案の如きは毎年通過するとなく、其に引き換へ工場抵當法案の如きは、今年始めて議會に出て直ちに通過せんとする摸樣である、無告の民たる勞働者保護を目的とする工場法案は立消になり、世の權力者たる資本家保護を目的とする抵當法案が却て立ろに成立するといふ、何と矛盾の至極ではあるまいか

△又た米の輸入税にしても、之が爲めに利益を得るものは資本家ばかり、勞働者や小作人は米價の騰貴によりて益々困窮に陥るのである、滑稽なのは之を政府自ら戰時税として提出したとである、蓋し之に依て政府は幾分か税を徵收するとが出來やう、乍併米價騰貴の結果陸軍者か損する處（多く米を消費する故に）は又た幾何ぞや、何れにしても儲けるのは此間に介在する資本家のみ、あゝ馬鹿らしき社會なる哉

◎第三は國際上の例　である

△一方に世界人類の幸福の爲にとて、彼の萬國平和を主唱した露國皇帝が、未だ其舌根の乾かざるに日本に對して開戰を宣言する、そして日本は人道の敵だといふ、若し日本が人道の敵ならば、態々波的艦隊を發し、時間と勞力と費用とを使つて遠征をするには及ばない、宜しく世界の東洋艦隊が一團となつて日本に攻めかく可きじや無いか

△元來人道は國に依つて異るべき者じや無い、若し日本が露國に對して人道の敵ならば、全世界に對しても敵で無ければならん、故に若し此國際間に道德ありとすれば局外中立を守るとか、違反だとかいふ如きは抑も末である、宜しく全世界が敵か味方になるべきである

是等は僅かな時間內に、狹き局部內に於て行はるゝ事實である、されど實に驚くべき矛盾ではあるまいか

抑も斯の如き事實は何に依て起るのであるか、予を以て見れば、畢竟之れ個人的利己主義より生じ來る所の矛盾衝突である、一國は一國のみの利を計り、政府は政府のみの利を計り、資本家は資本家のみの利を計る、人類共同の幸福などは遂に毫頭も考へられぬのである、誰か今日の所謂文明を榮光なりとなすや

吾等は到底此惡社會に滿足するとが出來ぬ、然らば如何にして之を改めるか、予は前揭三事例に對して簡單なる方策を樹て、證く

△國際爭鬪の防止　露國社會黨のノヤコフ氏が言ふた如く、今日の國際戰爭の起る原因は實は國內の階級制度にあるのだ、彼の戰爭させる人と戰爭する人、利益を得る人と生命を窕つる人、換言すれば紳士閥と平民との階級あるが故に戰爭も起るのである、故に此階級を打破して四民平等の世になれば自然戰爭を主張する人も無くなるのである

△政治上　に於ては議會や政府を以て人民全體の利益を目的とする機關とせねばならぬ、而して其第一着步は普通選擧である

△最後に經濟上　の改革法は即ち吾等が平生の第一主張たる土地資本の公有と共同の生產である、そうすれば深川の米屋が赤阪まで行く樣な不經濟な事は已まざるを得ぬ、無宿者は救はれ、失業大工は無くなる譯である

要するに個人の利益と社會全體の利益、政府の利益と人民の利益、一國の利益と全世界の利益が衝突すること能はざるの世に改めねばならぬ、即ち我が社會主義を實行せよと謂ふことになるのである

●社會主義運動統計

△社會主義の新聞雜誌

	黨派機關	其中日刊	勞働組合	產業組合
獨逸	八四	五四	七五	……
佛蘭西	四五	三	……	……
伊太利	六九	五	二三	……
英吉利	四	……	……	……
白耳義	四二	六	一一	……
丁抹	二四	二二	三二	……
瑞典	一三	三	……	二〇
那威	六	三	……	一一
和蘭	一二	一	……	四〇
瑞西	五	……	……	……
墺太利	三七	二	五五	……
匈牙利	七	……	八	……
ボヘミア	一六	二	一九	……
芬蘭	八	……	……	三
波蘭（墺部）	八	一	……	……
西班牙	一二	……	……	……
ブルガリア	九	……	……	……
濠洲	三	……	……	……
アルメニア	二	……	……	……
アルゼンチン	二	……	……	……
ルキセンブルグ	二	……	……	……
北米合衆國	四〇	二（獨文）	……	……

△世界各國社會黨投票

	選擧年	投票	社會黨代議士	代議士總數
獨逸	一九〇三	三、〇一〇、七七一	八一	三九七
佛蘭西	一九〇二	八〇五、〇〇〇	四八	五八四
墺太利	一九〇一	七八〇、〇〇〇	一〇	三六三
白耳義	一九〇四	四六三、九六七	二八	一六六
伊太利	一九〇四	三〇一、五二五	二九	五〇八
瑞西	一九〇二	一〇〇、〇〇〇	一	六七〇
丁抹	一九〇三	五五、四七九	一六	一〇二
瑞典	一九〇二	一〇、〇〇〇	四	二三〇
和蘭	一九〇二	三八、二七九	七	一〇〇
西班牙	一九〇三	二九、〇〇〇	―	―
那威	一九〇三	二四、〇〇〇	四	一一四
ブルガリア	一九〇三	九、〇〇〇	―	―
カナダ	一九〇三	八、〇二五	―	―
アルゼンチン	一九〇三	五、〇〇〇	一	―
愛蘭	一九〇二	一、〇五四	―	―
北米合衆國	一九〇四	四〇〇、〇〇〇	―	―

世界社會黨投票總數……六、六八六、〇〇〇

△各國社會黨代表者

獨逸	諸州議會の議員	一一一
佛蘭西	市長	六八
	市會議員	一二〇〇
	縣會議員	四三
伊太利	社會黨員中の市會	一〇〇〇
白耳義	市會議員	六〇〇
	縣會議員	七〇
	上院議員	四
丁抹	市會議員	四〇〇
	上院議員	一
瑞典	市會議員	二〇
那威	市會議員	一七
瑞西	社會黨の代表せられたる州會	一七
	同上市會	四一
墺太利	市會議員	五二六

△勞働組合の實力

	年	會員數	其中婦人
獨逸	一九〇三	一、二三六、八〇〇	四〇、六六六
佛蘭西	一九〇一	五八〇、〇〇〇	―
伊太利	一九〇二	八〇〇、六六九	四七、四四〇
英吉利	一九〇一	一、九二二、七八〇	―
白耳義	一九〇二	一〇一、四八〇	三、六六九
丁抹	一九〇一	九六、〇〇〇	―
瑞典	一九〇四	八〇、〇〇〇	―
那威	一九〇三	八〇、〇〇〇	―
和蘭	―	四五、〇〇〇	―
瑞西	一九〇二	五二、九二一	―
墺太利	一九〇二	一六四、四六八	―
匈牙利	一九〇二	八、三三三	―
西班牙	―	五六、九〇〇	―
ブルガリア	一九〇三	一、六七五	―
濠洲	―	一五〇、〇〇〇	―
北米合衆國	一九〇三	二、四二一、〇〇〇	―
世界勞働組合員總數		七、三三八、三五〇	―

●番臺より主義を說く

拜啓唐突の段平に御赦し下され度候、去年二月頃私事當市七日町枚野書林に行き色々の書籍を見て居りました處、フト平民新聞の廣告が目につきました、そして其平民と云ふ文字が何となしに私の心を動かし、私も是非に見たいと思ひ、直に注文してそれより今も愛讀致して居ります、而して今では社會主義を深く信じて居ります、而して私の心友で基督教信者なる某も亦、今では社會主義を贊成して吳れる樣に成りましてから、私は大變力強く思うて居ります

私の家は湯屋を業として居ります、それで私は番臺の上に登る時は、演壇にでも立つた樣な心持が致しまして、二三人寄つて煙草でも吸つて居ますと、直ぐに私は社會主義を話しまして、一人でも多くの人に此主義を知らせたいと心懸けて居ります、今では餘程私の話に贊成して吳れる人が出來ました

それで私は此度幸德西川兩君の行かるゝに付き、大奮發して傳道をやりたい積りです、それに付ては貴社諸君に御願ひ致したい事もあるのですが、何れ近々改めて申上げます、其時は宜しく願ひます、大奮發とて高が湯屋などして居る者ですから大した事は無いのです

二月十二日發行の『直言』に兩君の送別會のある事を見ました、依て萬ホ繰合せ必ず參會致します、然し私のは肉體の參るのではありません、靈が參るのです、それで會費として郵券五錢封入して置きました

羽前山形香澄町小姓口通り　庄司萬三郎

●雜誌品隲

（一）『日本人』

▲全國幾千の雜誌中、尤も眞面目で尤も無邪氣で、尤も品格ある者は、是れであらう、予は其表紙を開く每に、每に恩師に對するが如き一種の敬意を以てする者である

▲此雜誌全體を見渡すと、何となく地方の漢學塾の樣が想ひ出される、先づ雪嶺先生の一開篇の長論文は、牛白の老儒が見臺に向つて諄々として敎へて倦まずといふ風で、其他の記事論說、隨筆、時評、詩歌俳句などの雜然として陳れられたのは、塾中の腕白書生等が、風を捫り豆を嚙で或は讀書し、或は議論し、或は放吟して居るやうだ

▲此塾、決して只の訓詁に汲々たる塾ではなく、曾ては松陰の松下村塾の如く多少の風雲を捲起したともあつた、二十年前柔惰輕浮なる洋風が朝野を吹靡かして居る間に、國粹保存の大旗を押建て、士氣の振興、世教の維持に力めた時は、其先生は衣肝義膽の古武士の槪があり、其塾生にも多くの偶才が輩出した、彼等の起り、彼等の動くや、確かに時代の要求に應じたものであつた

▲洋風遣りの學校が村々落々に新設せられたる時代に相變らず破窓茅屋、權貴に阿らず、榮達を求めず、二十年一日の如く、昔しの意地を立て通して居るのは如何にも奥床しく思はれるが、扨ておのづからの變化は矢張此處にも免れない、衣肝義膽の武士は、今や牛白の老儒となり、謀叛の相談所は遂には只の寺小屋となり、塾中の偶才も或は志を得て去り、或は病を得て死して後は、殘るは選れくりの凡物が多いやうだ、世間でも亦仙人でもあるかのやうに噂さして居る、併し實際は全く之に反して居る、先生の學術文章の高さは言ふまでもなく、人生の波瀾、世間の情僞にも通曉して居られるのは、每號の論文を見れば能く分る、只だ自分は決して其波瀾に捲込れない、其情僞に引かゝらないだけのとである

▲『日本人』は最早當年の慷慨悲歌の士でなく、熱烈血性の士でなく、挺身難に赴くの士でなく、功名富貴に志あるの人では猶更無い、極めて冷かに極めて靜かに世間人事を局外から傍觀して居るので、其眼光は益々透徹し、其頭腦は益々明快になつて來る、其波瀾と情僞とが能く見える、能く分る、寧ろ見え過ぎる程見え分り過ぎる程分つて居るのである

▲故に社會人生に對するや、上よりも見、下よりも見、前よりも見、後よりも見、縱橫十文字に見て遺漏なきと同時に、何れから見ても氣に入らぬとゝなる、其觀察は適切である正論を得て居るが、結局常にネガテーヴの批評に了る、其說く所は多くのサゼツションは與へらるゝが、結論を得るのには甚だ遠ふ、といふ傾きがある、血氣の青年が今日の『日本人』に滿足せぬのは、此邊の理由ではあるまいか

▲併し先生自身には決して結論のないではない、何の求むる所なく、何の利する所なく、唯だ世の爲め人の爲めに諄々として士道の持すべく世教の重んずべきを敎へて倦ます、處身の主義の一貫して、極めて眞面目なる、極めて無邪氣なる、而も極めて品格あるとは吾人後進の尊敬を禁じ得ない所である（秋水記）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●箱根 山中の社會問題（一）

西川生

箱根の山中に滞在すること一週日、此の間に聞込み得し談片を取纏めて、余は諸君に少しく箱根山中の社會問題を紹介せんと欲す

（一）山林濫伐

箱根に行きて余の先づ驚きしは兀山の多かりしことなり、殆んど大木と云ふ大木を見るを得ざりしことなり

箱根の山々は初めよりして、果して斯く木に富まざりしものなる乎、否々決して然からずして、斯くなりし所以のものは

▲第一私有林と官林増加の結果、共有林減少して細民山に居て薪を買はざるべからざることゝなりしより止むを得ず盗に盗伐するに至りし爲めなり、聞く所によるに、枯枝を拾はんとて山に入る細民、枯枝を拾ながら鉈にて生木の枝を切り、以て次に來りし時に枯枝なきに苦しまぬ用意を爲し、又大木の根にて火を焼き自然に之れを枯すと云ふ

▲第二維新以來山林の境界に屢々爭ひ起り、此の爭論中、兩方競ふて濫伐を爲せし爲めなり

斯くして山は兀げ、大木は姿を隠くして箱根の美は何れかへ逃走せり、噫！

▲啻に美の逃走せしのみならず、濫伐の結果、今や既に箱根作工の材料にすら欠乏を感ずるに至り、之に用ゆべき木材の多くは、御殿場の向ふ甲州境より馬背によりて乙女峠を越へて運び來りつゝありとのことなり

▲故に若し、コゝに人あり、材木を汽車にて御殿場より國府津まで運び、車力の電車にて國府津より小田原まで運びて、小田原にて大仕掛に箱根作工を製造するに至らんか、今日箱根作工にて衣食せる山中の民は忽ち餓死するに至らん、小田原には既に物産會社と稱する、箱根作工を大仕掛に製造せんとの目的の會社ある程なれば、將來此恐れ確にありと思ふ

（二）山中の生存競爭

今や世に生存競爭の有らざる所なし、山中と雖も此の外に超然たること難し、殊に箱根の如き風景あり温泉ある所に於ては山中なりと雖も、生存競爭の激しきこと都會と異なるあるなし

▲箱根宮の下に富士屋と稱する大旅館あり、此の旅館の主人は洋行歸りの紳士にして神奈川神風樓の女婿なるが、彼は金力と財力を振廻はして切りに種々なる計畫を立て、在來の旅館を壓倒しつゝあり

芦の湯に元、旅館五軒ありしが、競爭の結果今や三軒倒れて二軒のみとなり居れり

▲湯本、塔の澤、宮の下、芦の湯、箱根町等、何れに於ても、大なる商人は外來者にして、ダン〳〵土地の商人は外來者に倒されつゝあり

▲山下は、湯本より箱根町に至るの間、人力車と籠との競爭なるが、今や此の間にガタ馬車を通はしめんと計畫するものあり、又湯本より宮の下まで電車を通ぜんと計畫せるものもあり

又一方には總湯と稱する共有の温泉なくならんとし、安宿なくならんとしつゝある現象あり

▲箱根山下の農民は、昔より毎年四五月の頃、或は十日間、或は一週間老幼打ちつれ立ちて温泉に遊び之れを一年間の保養となし居れる由にて、其の頃箱根に遊べば眞に愉快なりとのことなり

されば、競爭の極、總湯のなくならんとし、安宿のなくならんとしつゝあることは、山下の農民にとりても一問題たらざるべからず、余は天與の寶物、私人の金儲道具となりて、山下農民の幸福が奪はれんとしつゝあるを悲しむもの也

（三）山中の風俗問題

名所古蹟に住せる人にロクなものなし箱根の人々も此の例にはもれず

▲箱根宮の下には雜種兒多し、之れ云ふまでもなく此の邊住民の娘が淫を外人に賣りし結果にして、今や山中の人、娘に淫を賣しらしむるを耻じざるのみならず、反て奬勵するの風ありと云ふ、此の宮の下に昨年旅順にて陣没したるマカローフに曾て關係したる一老婆あるとも聞けり

又奢侈の風、此の山中の民をも見舞へり

▲其の一例を太平臺一老爺の口より聞かん、彼れ嘆じて曰く『私などは廿錢以上の羽織の紐を買ふたとが未だ曾てありませぬのに、内の若いものは此の間二圓卅錢もする羽織の紐を買ふて參りました、今の若いものはヒドク贅澤になつたものです』と

噫彼等は道徳を犠牲にして金を儲け、而して之を奢侈に浪費しつゝある也

（四）結論

箱根の山中にも斯くの如くにして貧民製造され、其の風俗破壊されつゝあり、吾人は今や何所に於ても大畧同樣の順序にて貧民増し、風俗破壊されつゝあるを見て、益々此の社會組織を改造するの急を感ぜずんばあらず

The presence of numerous houses of prostitution in the cities of the country is an evidence that capitalism already has destroyed homes.

此國の各都會に於て夥多なる娼樓の現存するは、即ち資本家制度が既に家庭を顚敗せしめたるを證する也

●怪しからぬ奴

木更津　石井生

二月三日（舊暦大晦日）の午後四時頃、或る豪農の宅で行商をして居ると、其處へ年齢四十格好の、みすぼらしき、二才ばかりの小兒を背負ふた、一人の婦人入り來り、如何なる譯か金三圓を取出して主人の前に差し置き、兎も角もこれ丈け請取つて殘金は來春迄猶豫して呉れと、頻りに嘆願して居たが、主人の豪農はそれを聞き入れる處か却つて眼を怒らして、『來年から小作はさせぬからさう思へ、今年の豊作に小作米を滯らして置いて、今となつて僅か三圓のはした金であとを待て呉れとは何事だ、怪しからぬ奴だ、親父（土地の言葉にて親父は事主を意味す）を連れて來い』と怒鳴りつけた、小生は側で聞くに堪へ兼ねて大いに辯護に力めたが、主人は中々應じて呉れず、『お前だちの知つた事では無い、默つて居ろ』と云ふのが、小生に對する最後の挨拶であつた、玆に至つて小生も不快で堪らず、折角見込を付けて來た商賣も爲る氣が無くなつたので、そこに此家を出で、覺束なくも此の憐れなる婦人を慰めつゝ、一緒に歸る道すがら聞く處に依れば、此の婦人の一家は彼の強慾無情なる豪農の小作をして居るのであるが、前年の不作と其他種々なる事情との爲めに、手許不如意の折柄、本年は近來稀れなる豊作で、ヤレ嬉しやと思つたが、今となつてはそれも糠喜び、此の戰爭に就いては貧乏人相當の支出もあり、知りつゝもツイ滯納となつた譯で、此の三圓も實は血の出る樣な金との事で小生がその血の出る樣な譯を押して聞くと『お恥しい事ですが、大晦日の事なれば責めて少しでもと、親子の者の正月着をソックリ質入れして拵へたのが、此の三圓の金で御座います』と云ふのであつた、小生は此話を聞いて何とも云へぬ感に打たれた、豪農の眼から見たら、それは僅か三圓のはした金でもあらうが、又た怪しからぬ奴でもあらうが、一夜明ければ春風の吹かうと云ふ大晦日に、親子諸共正月の晴着を質入れする正直な小作人に取つては、其の三圓は血の出るやうな大金であるのだ、小生は不快で堪らぬまゝ、口の中で、彼の豪農の云つた『僅か三圓のはした金』『怪しからぬ奴』の二語を繰り返しつゝ我家に歸つたが、歸宅して見ると、平民新聞の第六十三號と第六十四號とが配布用として届いて居たので、それで小生の胸の溜飲もヤット下つて、大いに愉快を感じた、

●女男兩性の關係

（トルストイ）

△男女の性交が人の健康に必要なりとの説は全然虚偽也、此説あるが爲に世に幾多の惡徳行はる、然れども一人の健康の爲に他人の生血を吸ふは斷じて非也

△今の戀愛の見解を一變せよ、性慾的情緒を一種高尚美麗なる詩的のものと爲すは非也、そは只人間が動物的状態に下落するものなるのみ

△今の社會に於ては、子を産む事は夫婦關係の目的及理由とならずして、只快樂の妨碍となれり、故に避姙法は盛に行はれ、姙娠中及哺乳中の交接も亦普通となれり、是れ實に甚だしき墮落也、性慾の節制は、實に人間のたるの品位威嚴也

△今の人の子を教育するは、動物の子を教育すると同じ、故に過食飽滿して色慾盛んに發生す、人の子は肉體以上に教育せざる可らず

△人の人たる目的、即ち人道の爲、國の爲、學問藝術の爲に盡す事は、決して男女結合の爲に遂げらるゝ者に非ず、否却つて之が爲に妨げらるゝ者也

△子を得んと欲する眞の正しき結婚と雖も猶非也、現に今の世に餓ゑたる幾萬の兒童あるに、何を苦しんで新に子を産まんとするや、現在一切の兒童が衣食に不足せざるを見たる後に非ざれば、眞の基督教徒は罪惡の感なくして結婚すること能はず

△故に清き青年男女は、其全力を神と人との爲に盡すべく、斷じて誘惑より離れよ、而して其思想と慾望とを更に清からしめよ、既に誘惑に陥りたる者は、之を唯一の墮落として、其人と共に生涯の結婚を爲せ、既に結婚せる者は、神と人との爲に妨となるべき關係を止め、性的戀愛を變じて兄弟姉妹の純潔なる愛と爲せ

△理想は絶對最高の者ならざる可らず、人の弱點に應じて理想を引下ぐる時は、終に止まる所を知らざるに至る、人は弱し、然れども弱ければ弱きだけ眞直なる定規に導かれざる可らず（枯川生述、同志の運動欄「社會主義研究會」記事參照）

●主義の歌

法の師よ、其の說く道よ、其法よ、譏ゑたる子等に何に値せん。

愛の旗、さゝげて進む弱き手に、とはに命の榮はありけり。

月を花を、樂し嬉しと歌はんに、餘りにたぎる我が若き血ぞ。

生くべくば、生くべき道に、死すべくば死すべき道に、あゝ主義の友。

愛に起ち、正義の道に死すを得ば、意氣の男の子の幸足らはずや。（民泉）

行け男の子、豺狼の群何かわらん、貧人の怪、牢は破れたり。

勞働の腕擲する賦もあれな、日毎歌はん畑の歸り路。

知るや君、牛のあへぎを知るや君、風流を誇る避暑の貴公子。

胸にもゆる雄心の血の冷ゆるまで、行け革命の旗を捧げて。

遥かなる筑紫の闇に光あり、ソシアリズムの強き光あり。（翠生）

人はありき、十字架の上に人はありき、千古たゞ一人、わが思ふ人

焰吐いて人昇天の姿見ずや、地の面十億みな仰ぎ泣く（秋白剛兄に）

壯士ひとり、ウラルを越えて送らまし、やわゝ易水の寒さに笑む子

うとましや、世の人、神の運命知らず、桃の花散り、百合の花咲く

年は去りぬ、我が背子逝きぬ、人二十、髪も短かし、あゝ世も狭き

誰故の戈を枕の夢と知るか、スラヴといふな、幌馬車の人よ

詩人ありき、相傳の劔なたにかへて、血の鳥去らん梓つくりけり（無名氏）

人間はゝ銀杏返の君とこそ、今日名も知らぬ美しの戀（松岡泣星）

譜をかしう、絃の亂に散りし梅を、一ひら封じ參らせ候（おしづ女）

うかうかと蝶の行衞を辿り來て、名なし祠に歌參らする（同上）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●社會醫に望む

ボストン市に於て　金子喜

△十二月八日發行の紐育『インデペンデント』紙は「社會主義と社會主義」と題せる社說を揭げて、頻りに世の所謂社會主義を難ずる者の、社會主義の何たるを知らず、而して又社會主義を主張する者の、度量餘りに狹くして、現時既に行はれつゝある社會主義の精神の實狀を認容せざるを慨せり、

△社會主義はシモン、フーエン、マルクス、ラサールの貴むべき頭腦より生れ出でし者なるを知らざるか、社會主義の思想は或一派の主張の如く、然く狹くるしき者にはあらず、勞働者が貴族富豪に代りて世界を支配するの謂にてあらざる也、所謂手と足とにて働く勞働者萬能の天地と世界を化する謂にあらざる也、

△社會主義は吾が北米レパブリックに現に行はれつゝあるを知らざるか、見よ彼の諸實州の都市が如何にその交通機關と公立學校を支配しつゝあるか、而して西部諸州の州立大學の行政を知らざるか、それらは皆な取りもなほさず、社會主義的精神の實行にてある也、社會主義を以て單に勞働階級の專有物と見做すが如きは、甚だしくその當を失せる者、

△著し、所謂社會主義の說教者や又かの無知なる新聞記者、著述家等にとりては此の高且つ大なる社會民衆の幸福や、進步や、發達やの問題は、餘りに廣きに失せり、彼等は色眼鏡を通じて世と人とを見る者、所詮公平にして正大なる人道の全面を見る能はざる也、

△「インデペンデント」紙は、平生公平の論議を以て、紐育新聞雜誌界に卓立せる者、今此の評論に接して、吾人は眞に他山の石を得たるの感なくんばあらず、思ふに北米に於て今の社會主義を曰ふ者は少しく狹に失せるにはあらざるか、彼等はマルクスの信奉者にあらざれば、到底社會主義者にてあらざる如く思へり、

△予の見る所を以てすれば、社會主義は所謂ラサール、マルクスの一人二人を以て代表されべきほど少なる者にはあらざる也、社會主義は例令へば大海の如く廣且深也、マルクスや、エンゲルや、ロドベルタスや、畢竟その海洋に浮べる舟の如きか、マルクスの舟にのりて海洋を見る者は、マルクスの舟の周圍の海洋を見しに過ぎざる也、エンゲル然り、ロドベルタス然り、豈にこれを以て社會主義の全面を見し者といふべけんや、

△予は常に思ふ、社會主義が宗敎的態度を取る時に於て、最も危險なる時也と。何となればそこに進步は其進みをとゞむれば也、そこに進化の理法は其姿をかくせば也、そこに感情のみの感情は重なる支配者となれば也、

△吾人をしてマルクスに吾人の步足をとゞめしむること勿れ、キリスト敎徒が二千年前のキリストにその步足をとゞめしは、彼等の今日ある所以と知れ、

△社會は一日も靜かなる能はず、人は常に何物にか向ふて進みつゝある也、換言せば、社會と人と何れも皆な活ける者也、されば、その疾病も又靜かなる者にてあらざる也、昨、もりし醫藥は必ずしも今日の疾病に適せざる也、病が種々なる形に於て變りゆく時、醫藥も從ふて變化せざるを得ず。社會改良とは遂に此の變化し行く疾病の改良にてはあらざるか、吾人は「インデペンデント」記者と共に、世の所謂社會醫に向ふて敢て一考を煩はさんとする者也、活ける社會主義と死せる社會主義との區別を認識せられむことを切望する者也、

●社會主義の歌

孤劍

偽善者聖き壇下れ
疾風ふきちる粃糠の
空しき言葉聽くべきか
富の暴力の颱しきは
譬へば狂ふ怒濤の
汀の靑蘆を捲く如し

快樂の海の鷗
驕奢と慾の冠毛を
太陽に輝かしほこれども
人は憂愁の搭の影
飢をかなしむ野鼠の
暗黑を逐ふて號哭けるを

「自由」に歌ふ小雀よ
「權力」に媚びぬ野の花や
人の子何ぞ「屈從」と
「恐怖」は心靈を侮辱む
見よ豺狼は白日に
虛榮の街を奔りゆく

「恥辱」に眩ゆる綺羅の衣
燃ゆる血潮に焚かしめよ
「罪惡」に聳ゆる三層樓
火の洗禮をわたへざる
石炭を嚙つて生活んより
人道の戰鬪に斃ればや

豫言者鞭に叱咤せば
紅海の水涸れにしよ
「富」を地上に仆すこそ
「權力」を最後に沈むこそ
鶴嘴握る銅色の
我が掌にこもらずや

モリス叫びぬ全球の
王の王なる寶冠は
鐵槌揮ふ勞働の
蓬髮破服の人にこそ
苦役い軛つらくとも
高き理想を追求めざる

あゝ「平和」を舟として
「自由」の岸に行かしめよ
「道德」も「藝術」も「文明」も
美なる花環に飾られて
愛の光線に人の子が
聖き慾こそ進みなむ

無花果の若枝柔らかに
嫩葉の芽ぐみなば夏を知る
ソシアリズムの閃めきは
十五億なる同胞を
歡喜の門にさそふべき
これ天國の玉鑰ならずや

●紳士閥の音樂會

滴瀝逸民

予は不圖したことより、紳士閥の音樂會に列るの榮を得たり、二月十一日午後、上野音樂學校に於て、基督敎團體によりて軍隊慰勞慈善音樂會が開かれた、入場券一枚が二圓も三圓もするものなれば、貧にもあらぬ吾等平民には望みがたき慈善なりと思ひしに、天なる乎時なるか、予は一友人音樂者より、二等入場券一枚を得たり、而して同時に「モ少し美しい着物を着て來い」と宣告されぬ、去れど予は一枚の着變をも持たず朝野の紳士淑女の居並び給ふべき所へ、此分では如何と氣が引けたれど行きぬ、電車のパツスは友人より惠まる。

上野の山内には今日を盛りと粧ひを盡したヤンゴトなかるべき人々引きも切らず、予は幾度か御者車や、二頭立に叱からたる後、やうやくにして奏樂堂に入るに、既に集へるもの席に滿つ、滿堂桜花の如し、文字少なき予は不幸にして他の形容詞を見出す能はず。

只何となく面白きが如く、嬉しきが如く、而して又馬鹿らしきが如しピアノ、ヴアイオリン、ヴオカル等數番、後では三曲、長唄、常盤津等もあり、「四ツの海、波風立たず……」とか歌ひ出でたる時、滿堂忽に立ち上る、氣のきかざる予は何事やらんと例によつてボケ々々して立たず、隣席のレデースが「閑院の宮妃殿下」と囁やけるにてヤツト心付く。

五時半に散す、腕車や馬車は今威勢よく、夕陽を浴びたる上野の森を飛び去りて、路傍には『旦那樣一文やつて下さいまし』と小供と三人連の盲人もあり、向ふより破れ三味線抱へたる一老婆が、古絲の露の命を繫ぎ兼て來るあり、予の乘れる電車の運轉手は途中にて巡査と何か喧嘩せり、儘も世の中は樣々なるものならすや。

昔アセンスの全盛時代には、音樂も、芝居も、浴場も、一般公衆（勿論奴隷は別問題なれど）に對して無料なりしと謂へり、金の有る一部の少數者計りが文明を玩具にして、多數の平民は之に關り知らざるが如くんば、今の文明は偏り貴族富豪のみの文明なり、餘りに好きことには非ず。

昔孟子が齊の宣王とか云ふ男に見えたるとき、賢人にも遊樂はあるかと問はれて、聖人だつて君子だつて、道樂はしてもいゝが、平民どもと一所にすべしと答へたりと聞けり、早く皆で一所に、ヨセの一晩も只聞ける工夫のしたきものにあらずや。

●東西南北より

▲鹿兒島縣日置郡永吉村の山内某と云へるは、一月廿九日山なす借金を背負ひきれず、七十餘歲の先父と共に自殺を遂げたり、個人競爭の惡社會は斯くも無慘に人を殺すか（中馬誠之助）

▲我が法官の中、行政官の中に、社會主義を信じつゝある者多々在るべしと雖も、彼等は長官の怒に觸れんとを恐れ、強いてパンを得るの道絕えんとを思うて、抑へて敢て發せざるのみならず、心にもなき迫害を爲すに至る、眞心の苛責、已を欺くの罪、吾人は同情の淚を以て彼等に酬ゐるなり（掬露生）

▲僕は一二ケ月靜養して、今度は九州、山陰、北陸を經、信州、上州を過ぎて、今秋九月頃入京の積り、……直言が週刊になつたのを見て、僕は實に喜んだ、天下幾萬の同志はホツト安心したであらう（小田賴造）

▲僕も身體がスツカリ弱り、殊に例の痔疾で、厄體な話だが、毎日雪隱でうん／＼呻つて居るテイタラク、それに此頃の寒さでは毎日泣きたい程の苦み……兄等は是非入獄しなければなりますまい……兄よ兄等ばかりを苦しめはせぬ、僕も後から行く、きつと行く、……下の關の……といふ人、これは熱心な社會主義者で、その細君も又夫君に劣らぬ同主義者で、丁度『火の柱』の山木梅子のやうな人であるが、昨日も二人で訪問せられて、社會主義の爲め、平民社の爲め、僕の宅で祈禱會を開いた、此細君が兄及幸德氏の爲に熱淚を流し、泣いて上天に祈られたのには、僕は胸がいまつて何とも云へぬ感に打たれた、夫人は毎日毎夜兄等の爲めに祈らぬとはないとの事、兄よ同情は意外の所にある（山口義三）

▲此頃計劃せられつゝある義勇艦隊發設募集につき當地方にては小學校の兒童より一人一圓五十錢以上を醵出すべく內達せられ候、我校の如き二百五十の生徒を有する小學校に二百六十餘圓の名額を配當され、校長は分區委員なるものに囑託せられ、誠に當惑致し居候、而して其財源は兒童の貯金よりとの內達に候、之には流石の帝國主義一天張の敎育家先達も少しは目が醒めたるらしく、愛國心の惡用を罵る者も間には有之候（九州の一同志）

▲余の家業は質商なり、余は日々此家業に從事しながら、重大なる罪惡を犯す樣にて、非常の苦痛を感ずるのです、されぱとて社會主義を棄てる事も出來ず、又親兄よりの家業を棄てる事も難し、足下よ願はく余に福音を授けられよ（京都一讀者）△質商に限らず今の社會の職業に就く者は皆幾許か罪惡を犯して居ります、眞心の銳敏なる者は皆其苦痛を感ずるのです、然しながらそれは今日に於て致方がありませぬ、成るべく殘酷な扱ひの無い樣に、成るべく罪惡の少くない樣に、成るべく我が心の濟む樣にして、そして一方には社會改善の爲に（即ち此主義の宣傳及實行の爲に）盡すより外はありませぬ（記者）

▲私も一ツの虛榮心に犯されて東都に遊學致しましたが見事失敗致し、其後は學校の雇に、役場の書記に轉轉致し、最後に下宿屋を營みましたが是も失敗、止むなく區役所の雇となりましたが、此時が私の最も悲むべく喜ぶべき時でありました、こゝで私は友人に社會主義を說かれまして、こゝで始めて悟りました社會主義の眞理であるとを、只今では區役所を辭して田舍に歸り食客となりました、其後は友人に知人に及ぶ限り社會主義を說いて居ります、皆喜んで聞いて吳れます、只一葉の新聞紙が夫れから夫れへと目下十數人の愛讀する所となつて居ります、彼等は皆學校敎員郡會等でありますが、以て風潮の如何が分るかと思います（阪島昇）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●通俗社會主義

プラチフォート著
堺　枯川抄譯

（二）體と心とに必要な物

諸君は勿論不愉快な事をするよりも愉快な事をする方がお好に違ひない。厭な職業よりも面白い職業の方がお好に違ひない。汚い處に住むよりも奇麗な處に住む方がお好に違ひない。一日十二時間働くよりも四五時間くらゐ働く方がお好に違ひない、欲しい物の心に任せぬよりも欲しい物の自由に得られる方がお好に違ひない。

假に諸君が鐘が淵の紡績職工であるとして、諸君はナゼ鐘が淵に住ひ、ナゼ紡績會社に働くのですか。諸君は必ず〝暮しい爲に〟と仰しやるでせう。然し鐘が淵は決して住心地の善い處では無い、工場は決して居心地の善い處では無い。そして諸君は隨分長い時間働いて、欲い物はとても思ふ樣に得られは仕ますまい。ツマリ餘り善い暮しぢやありますまい

然らば一體我々が、幸福なる、健全なる、然るべき人間として善い暮しをするには、何々の物が必要でありませう。私は之を二種に別つ。精神的及び物質的、と云へば六かしいが、ツマリ體の爲の物と心の爲の物とです。

人間には心と體とがあるので、體ばかり養つたのでは到底滿足の出來るものではありません。花に必要な物は土と肥料だと云つて、日陰に菊を植ゑて御覧なさい、滅多に花が咲くものでは無い。花には土と肥料との外に日光と雨露とが必要です。それと同じで、人間も亦衣食住の外に、愛を要し、望を要し、安息を要し笑を要し、音樂を要し、智識を要するのです。若し人間の生活が、食うて飲んで寢て働いて、其外に何んにも無かつたならば、それはモウ終身懲役と同じ事で、生きて居る甲斐は無い。いつそ其鎖を引きちぎつて、死んだ方が増な位。

そこで我々の爲に必要な物を、今少し善く考へて見ませう。體の爲に二つ、健康と衣食住。心の爲に三つ、智識と快樂と交際。

先づ健康の爲には、我々は成るべく自然に近い生活をせねばならぬ。即ち、清潔なる空氣、清潔なる水、清潔にして十分なる食物、運動、休息、暖氣、安心等が必要です。そして十分に健康な人は、必ず力が強くて顔容の美しいものですが今の世の勞働者の姿はマアどうです。若しアノ人達に自然らしい生活をさせたなら、モット美しいモット丈夫な人になつて、命もモット長くなるに違ありません

次に衣食住。何も贅澤をするには及ばず、否な贅澤は却つて體に害がありますから、只心持の善い家に住んで、清潔な食物を喰て、純良の食物を食べて居れば、それで善いのですが、今の世の貧乏人の衣食住はマアどうです。薩摩芋の切れはしを常食にしたり、三疊敷に夫婦親子六人も住んだり、煮しめた樣な襤褸に縄の帶をしたりそれで人間と云はれませうか

次に智識。天文學とか、博物學とか、理化學とか云へば、學問を知らぬ人には砂を嚙む樣にも思はれませうが、學者から云ふ時には、蜜の滴る樣な心地がするのです。其外、文學なり、歷史なり、法律なり、哲學なり、語學なり、或は實用として、或は單に娯樂として、限りなき愉快を我々に與へるではありませぬかそれを多數の人民には一切與り知らしめず甚だしきは新聞を讀む事すら出來ぬ者があるとは、マア何といふ殘酷な事でせう

次に交際、友人の交り、男女の交り、同志者の交り、家族の交り、近隣の交りそれが得られずては人生の旨味は全く無いと云つても善いのです。所が今の世の貧者の多數に此樂みが十分に在るか否か之を要するに、今の世の多數の人は、心の爲にも、體の爲にも、決して必要な物を得て居りませぬ、彼等はそれを買ふだけの金も無ければ、それを樂むだけの暇も無い、所で私は云ふのです、彼等は是非それを得ねばならぬ、又得る法がある、私は其法を御傳授します。

（三）改良法の大體

私は先づ茲で左の十二個條を諸君に申上げて置きたい。是は何人も拒む事の出來ぬ、今の社會の事實です。

（一）正直にして勤勉なる多數の人が粗惡なる衣食住を給せられて居る事。

（二）年々幾千の人が、用心をすれば防がるべき病氣で、ムザ〳〵と死ぬる事

（三）人の平均の壽命が、不自然なる生活の爲に大變短くなつて居る事。

（四）多數の人が、永年苦しく働いた後、餘儀なく養育院に入れられて、侮辱と輕蔑との間に其老後を送る事。

（五）一番多く、一番長く働く者は、一番賃銀が少いと云ふのが、殆んど一定不變の規則となつて居る事。

（六）一番の金持は何人にも役に立つ事をせぬ人と極つて居る事。

（七）富と力とが智識や勉强や道德よりも尊まれて居る事。

（八）數萬の男女が、幾ら働かうと思つても仕事を得ずに遊んで居る事。

（九）一方には、石炭や、棉布や、穀物の生産過多の爲、賃銀がズン〳〵下つて、一方には、勞働者の多くが、食物や燃料や、着物を得ずに困つて居る事。

（十）土地其他の財産の殆んど全部は少數なる怠惰者に所有せられ、大概の法律は是等の富者を保護せんが爲に作られて居る事。

（十一）農業が急速に衰退して、國の大害となり大危險となりつゝある事。

（十二）競爭の爲に數百萬の人が無益醜惡なる事業に使用せられ、貪欲なる悪漢が他人を追越さんとするが爲に、一國の生産機關がメチヤ〳〵にせられる事。

然るに、是等の事實は、諸君勞働者の生活の爲に、是非とも必要な制度だと云はれて居ります。

所で、諸君は果して如何なる生活をして居られるか。諸君は假に一週五十三時間より七十時間まで工場に使用せられて居るとする。諸君の同僚の或者は更に多く、更に長く、更に甚しき處に於て働いて居るかも知れぬ。何にしても、諸君の階級は長時間の勞働をして、其勞働は單調で、無趣味で、苦痛で、其周圍は常に不健全で、不愉快で、危險なものだと極つて居る。

そして諸君の賃銀は幾らです。諸君は其賃銀で如何なる生活が出來ます。諸君の食物には料理法も何もありますまい。諸君の着物には縞柄も仕立もありますまい。諸君の家は薄暗い穴の樣な處でせうそして其外に諸君に何の樂みがあります音樂もあるまい、繪畫もあるまい、芝居もあるまい。遊戲もあるまい。酒や博奕や惡所通はあるかも知れぬが。

そこで、こんな弊害は何から來るかと云ふに、諸君、是れは全く競爭の惡制度の結果です。

早い話が、チヨイトそこらの町に出て御覧なさい、牛乳配達が幾人も幾人も、銘々少しづゝの得意を持つて、競爭して走つて居るが。郵便配達になると、チャンと一人で一區を受持つて居る競爭さへ無ければ、牛乳配達も郵便配達と同じに行く筈です。

それから又、何千何萬の家が、一軒づつ別々に食事拵へをしたり、洗濯をしたり、それが爲にはオカミさん乃至女中が一日天てこ舞をして、そして碌な物は出來ないではありませぬか。又八百屋などが二三軒おき位に隣りあつて、銘々に人を使つて、店を張つて、盛んに競爭をして居るのがあるが、あれを合せて一軒の店にしたら、幾ら費用が省けるか知れぬ若し私立の郵便局が一町毎に在ると假定したら、手紙一本送るのに、どれだけ費用を取られるか知れますまい。

そこで私の改良法の大體を、チヨツト茲にお話致しませう。先づ私は人數を定めて、我國に入用なだけの穀物と果物と家畜とを作る事に掛つて貰ひます。それから漁業を改良して、處々の河水や港灣に養魚所を設けます。それから鑛山や工場を我國人民に必要なだけの程度に制限します。それから水力と電力と、利用法を進歩させて、煤や烟の汚さを改めます是等の事を行ふ爲には、總ての土地、鑛山、工場、商店、船舶、鐵道等を、一切人民の財産とせねばなりませぬ。

それから私は都會を作り直して、町幅を廣くし、家と家との間を離し、花園を設け、泉水を設け、並木の大通を設け、鐵道も、郵便も、荷物の運送も、皆な道路や橋の如く無賃にして仕舞ひます。それから家は今より高く大きく建築して、無益な家具を無くして仕舞ひます。又私は公立食堂、公立浴場、公立洗濯場などを都合よく拵へて、婦人の手を自由にしたいと思ひます。

それから又、公園、劇場、音樂堂、遊戲場、體操場、公會堂などを、悉く公費を以て十分に設備する事は無論です。子供の衣食と教育とも亦、國費を以て辨じたいと思ひます。そして仕舞には、人間の生活に必要なる衣食住、娯樂、交際、教育など、總て金錢を用ゐずして、人民の間に生産し、分配し、使用したいと思ひます。

扨こんな事がドウして出來るか。それは追々後の章に申上げます。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

同志の運動

▲社會主義大演說會（青年會館）

△又々中止！解散！

豫告の如く十三日午後六時より開會した、廣告の手配など行屆かなかつた故、景況如何かと氣遣ふて居たが、開いて見れば豫想の外で、來聽者は無慮七百名もあつた、△第一席として山田金一郎氏登壇「平民の眼に映じたる文明」に就て三四十分演說し、當に過半の程に及びて中止せられ、△第二席として本社の石川三四郎登壇、先づ口を開いて「予の如き喧歸の者が此壇に登り拙き話をお聞かせ申さゞるを得ざるに至りしは、幸德、西川兩君の獄に投ぜらるゝが爲で、畢竟是れ予の罪に非ずして政府當局の罪なり」といふや否や、大聲一喝、中止の命は直下した、△第三席として木下尚江氏は直に入り代れり、彼は最も婉曲なる言路を辿りて、宗教上の沿革より露國今日の革命に及び、暗に民主々義を鼓吹して無事演了した、△第四席には本社の堺利彥「紳士閥と平民」てふ演題の下に約二十分演說し、將に紳士閥の定義に及ばんとするや、又々無意味なる中止の命下り、次で解散を宣告された、△忽ち場内は騷擾を始めた、拍手は起る、社會萬萬歳の聲は起る、呼聲、足踏み、騒擾は起る、其間徐ろに社會主義の歌の唱聲、會場の一隅より起り、衆皆之に和す、實に氣が晴れ〳〵した、全く散會した後に有志者は又た別室に集まり、歡を盡して歸へつた

▲社會主義研究會（平民社）

例の通り去る十二日夜六時半より本社樓上に開會、前會より豫告せし堺生の「性慾論」第一回の講話ありたり、講話終りて後、小川、森近、大亦諸氏の演說ありて九時半社會主義の歌を歌ひつゝ閉會せり、附記す、堺生當夜の講話は唯だトルストイ翁の「男女の關係」を紹介せしに止まれり、次回にはカーペンター氏の說を紹介して結論に及ぶ筈なり

▲勞働者談話會

去十四日夜、京橋區佃島某氏宅で開かれたる勞働者談話會へ出席した、集まるもの八名、醬油で煮染た樣な疊の上に坐し、パチ〳〵はじく粉炭の火鉢に暖りながら欠餅と澤庵を噛で快談した、仲々愉快だつた△其の中にコウ云ふ話もあつた「此の頃はドコの裏長屋へ行て見ても臼術なカク音がしなくなつた、味噌を磨る音も減つた、其の代り漬物がヨク賣れる樣になつたソウだや、コレは勿論貧乏人が朝飯の味噌汁を廢して漬物のみで濟ますことにした爲めであろう」（西川生）

▲北總青年會社會主義研究會

去る十日香取郡古城村に開會、本村は當地方に於て教育の最も進歩せる所にして、村の青年は從來研究會を起して時々相會し、講話討論等をなし來りしが、十日は舊正月七草にて會するもの殊に頗る多く、余は昨年一月「帝國主義と非戰論」に付て談話せし緣にて今度は「地方自治と改良會の活動」の下に町村の政治に社會主義を應用するの急務を語りぬ、同地方の地主は增稅の爲め小作料引上に付相談中なる由（吉田生）

▲神戶平民倶樂部第六例會

豫定通り二月十一日の夜、雲井通り岡方にて開會、今回初めて平民倶樂部の赤提灯を吊した、集會者は少なかつたが、思はぬ新顏の人が六人見へた、中には出獄人保護事業に骨を折て居る人もあり、明石から遙々來會された熱心家もあつた、野花生の主義の講演、天愚生の消費組合の話あり、後は主として罪といふもと罪人を救ふ方法とで談は持ちきり、十二時散會

▲函館平民倶樂部

去る三日午後六時開會、從來の讀者會を平民倶樂部と改稱するに決したり、當夜は來會者少數なりし故、種種感話を爲せしのみにて九時過ぎ散會せり、猶ほ十日を以て更に開催の筈なり（內藤生）

▲倶樂部設立（横濱曙會）

這般横濱曙會で末吉町三丁目四十八番地高畑氏方に倶樂部を設立しました、これから每土曜日に其處で主義研究會を催ほし又時々茶話會を開きます

▲信州神川村讀者會

△時　來二月十九日午後七時より
△所　岩下太田信宅に開會
△會費　金三錢の事

▲千葉讀者會

△時　二月廿六日（日曜）午後一時より
△處　市川師範學校前新仲屋

▲信州神川村讀者會

△時　二十日（月曜）午後七時
△處　岩下區太田信
△費　金三錢

●運動基金寄附廣告

▲金廿六圓　二月十三日演說會純益
▲金一圓五十錢　同志婦人七名手藝品賣揚
▲金一圓　中村信次郎氏
▲金五十錢　山　本　氏
▲金三十錢　三河　碧　南　生
▲金二十五錢　和歌山　吉田　晶一氏
▲金三十五錢　磐城　渡邊鋒次郎氏
▲金七十錢　第一軍　無　名　氏
▲金二圓九十錢　元　登　美　生
▲金三圓　佐倉　宮崎　平吉氏
▲金十二錢　橫濱　角田清次郎氏

小計　金三十六圓五十七錢（二月十日より二月十六日迄）

●醫員を求む

社會主義者にして神奈川分院詰め希望者は午前中に來談あれ

東京市京橋區木挽町六丁目　加藤病院

●平民社より

枯川生

△去十一日、福田英子さんに招待せられて、西川、石川松岡、森近、志津野、土屋の諸君と共に角筈に出かけた。ザツト二里ばかりの道を電車に沿うて歩いて行つた。其處に幸德君もヤツて來る、逸見斧吉君御夫婦も見える。竹內餘所次郎君の奧さんも來て臺所の手傳をして入らつしやる。中々賑かな會合であつた。午後は皆打連れて（幸德夫人も加はつて）、ツイ近處の『銀世界』といふ梅屋敷から、例の（予の出獄の時の園遊會の催された）『十二社』にかけて遊びあるいた。此日森近君に『山邊の赤人』といふ仇名がついた。蓋し其のインバネスの形に取る所ある也。

△森近君は十五日の正午に新橋を出發した。吾人は大阪平民社が（よし豆つぶの如く小さきものにもせよ）、森近君及び其近隣に於ける諸同志の力に依つて、健全に、鞏固に、其根をおろさんことを切望する者である。

△志津野又郎氏は早稻田出身の同志の一人であるが、今度奈良の新聞を罷めて上京して、當分平民社に滯在して居る。

△飛彈の同志大林二郎氏が數日前から上京して居る。氏は其兄君澤田穗束氏と共に、飛彈の山中に大分此主義の豆を植ゑた人である。おみやげに神通川の鮭を貰つた。序に記す、此間書いた栗餅は間違で、實は橡（トチ）餅であつた。

△鈴木雷一郎氏より『直言週刊の祝意を表れ、平民新聞被告事件の御見舞として』鯉を二匹贈られた。色々貰ひ物があるので、平民社の食卓が存外賑ふ。

△平民社の食卓に一つ人を驚かすものがある。それは我々の用ゐる飯くひ茶碗で、實は口徑四寸五分位のドンブリ鉢だ。小さい茶碗では、三べんも五へんもお給仕するのが繁雜だからと云ふので、松岡さんの意匠に依つて斯くの如く改められたのである。我々はそれで至極面白く思つて居るが、たまに來るお客さんなどは隨分ビツクリなさる樣だ。

△此間一つおかしい事があつた。丁度僕が社の玄關に居あはせた時、三十恰好の一人の男が入つて來て、『良人の自白』と『火の柱』と十部づゝ呉れと仰しやる。是れは善いお客だと思つて、早速本を取揃へて持出すと『ツイそこの、山下見附の外の、學校の前の、高橋といふ家まで屆けてくれ、そして受取を持つて來て呉れゝば直ぐに代金を拂ふから』と仰しやつて、其儘ズイとお歸りになつた。僕は委細承知して、本を風呂敷に包んで金六圓也の請取證を揃へて、手傳に來て居た政姉さんを賴んで、高橋樣へ持たせてやつた。所が暫くすると其姉さんが歸つて來て、『今途中でアノお方に會ひましたれば、「火の柱」をモウ五部だけ急いで持つて來て呉れと仰しやる』との事。いよ〳〵以て善いお客と思つて居ると、又暫くして姉さん今度は息を切らして色を變へて歸つて來て、『高橋といふ家はドウ尋ねてもありません』と云ふ。それなら先の二十冊の本はと問へば、それはサツキ途中でアノ人に渡したと云ふ。ヤツそれならテツキリしてやられたのだ、ヒドイ奴もあるものだと、皆々大笑をした事でした。平民社も詐欺にあふ樣になりましたから、其繁昌想ふべしです。（十五日午後）

●新刊紹介

▲產業組合講義錄　本書は客年七月中農商務省に於て各道府縣廳及道府農會より一名宛の講習員を募集して產業組合の講習會を開きし時の講義筆記なり予は其重要と認むる點に就て槪評を試みむ、△農務局農政課長月田藤三郎氏の「組合の獎勵及監督」は、「國運昂進と共に各種の負擔過增し、產業界の主腦にして根本の生產者たる小產業者の漸次自營の職業を失つて賃金勞働者となり、車夫は其業を失ひ小地主は土地を失ひ小作人は田園を去つて都會に彷徨するの慘狀」を述べ「某耕地整理地區に於て、土地の殆んど總てが抵當部分なりしが如き事實」を擧げ「是等產業者の窮境を救ふべきもの產業組合を措いて他に適當の方策を發見せず」と斷じたり、然るに「單に小作人を苛むることのみ事とし、勞働者を奴隷の如く虐使するを本領となせる」所謂地方の有力者をして組合事業に盡力せしめよと曰へるが如きは、其甚だ實情に暗きを惜ましむ、△「產業組合と地方自治との關係」は內務省書記官井上、清野二氏の講ずる處、井上氏は公共心と忍耐力の必要なるを說き、英佛に於ける勞働者の團結にして、地方自治の基礎をなせる交友組合（フレンドリーソサイテー）若くは「蜂の町」「蟻の組合」等を擧げたり、今の內務省の官吏が外國勞働者の團結を稱揚するは奇なりと云ふべし、清野氏は「富の程度を計るに地方の負擔額を標準にする」と稱して色々の數字を並べたり、一般平民を以て單純なる納稅動物なりといふ如きは非人道の極と言はざるを得ず、△「組合制度の精神的要素」は內務省囑託井留岡氏の講ずる處、貧困問題の解釋として慈善事業よりも一歩を進めて自助的事業に入らざるべからずとせるは可なり、然れども社會主義は劇藥なるを以て用ゆべからずと斷ずる如きは理由なきものといふべし、蓋し自助的精神の終局は社會主義に來らざるを得ざれば也、△「產業組合と農工商水產林業の關係」は、農商務省各主任者の講述に係り大體に於て要領を得たるが如し、△「信用組合談」は加納久宜氏が實驗談なり、氏は日本に於けるライフアイゼンを以て任じ中小產業者に助力して彼等の獨立を圖ろに汲々たる者、安逸を貪以て誇りとする日本多數の貴族中他に比なきの人たり、其說は着實溫健にして熱誠の價値あり。△思ふに吾人の社會主義も、或程度迄は現今の進步せる社會政策と同一路を歩み得るは、吾人の異なるところ、吾人は社會主義者なるの故を以て一槪に現今の社會政策を否認し去るべきに非ず、議論の根底に横はれる思想は兎もあれ、事務上の參考書として本書の如き完全なる書冊の出版を喜ぶものなり（森近生）（價八五錢芝公園全國農事會發行）

▲日本の蜜柑（安部熊之輔著）　此書の著者安部氏は予と同鄉福岡縣豊前の老農也、淳撲溫健、予常に其高風に服す。二三年前、氏一篇の原稿を携へ來りて予に示し、其文字を潤色せんことを求めらる。受けて之を見るに、『日本の蜜柑』と題す。當時予文を賣つて家を支ふるの急に迫り、筆硯多忙を極めたりしかど、此の篤實なる老農の貴重なる著述に對し、多少の力を添へんことは、予の深く愉快に感ずる所なりしが故に、敢て勉强して多少の朱を加へたりき。爾後、氏は此書の出版に就て種々苦心する所ありしが、此頃に至り終に自ら之を刊行し、遙かに一本を予に贈られたり。其書たるや、製本堅固、裝釘美麗、紙質精良、印刷鮮明、予は幾度か之を開き之を閉ぢて、一種言ふべ可らざるの感興を覺えたり。予固より蜜柑の事を評論し得べき者に非ず、只著者の人物を紹介し、書中說く所、悉く是れ實地踏査の事にして、多年日本全國を歷遊したる結果なるを報じ、此書の必ず大いに世を益すべきを言はんと欲するのみ。最後に著者の序文の一節を左に錄す。（枯川生）

『社會の進步と生活の程度が、著しく昂上する現象の半面には、多勞少收の農家が、過重の負擔に苦むの趣を描く、また止むを得ざるの勢なりとす。茲に於て農家は……利を永久に齎すの副業を需めざるべからず、其副業として最も閑に、最も利に、而して之を永久に傳ふべきものはと問はゞ、予は先づ蜜柑の栽培を以て之に答へん、……蜜柑の栽培は地味の砂と土とを論ぜず、地形の山と野とを問はず、拓いてこれを栽え、耕してこれを培ひ、熱心と注意とを肥料とせば、十年ならずして好果を獲ん、若し夫れ十年を越えなば、年一年其收實を增し、其利益を加ふ、而して此累々たる黃金樹を永く子孫に傳ふるを得ん』

▲外交時報（八の二）　牛込早稻田大學內　其社
▲太陽（十一の二）　日本橋本町三丁目　博文館
▲教育新聞（九四）　神田千代田町　其社
▲南信評論（一二四）　信州諏訪郡上諏訪町　其社
▲ユニヴアサリスト（四）　名古屋東片端町　世光社
▲六大新報（七九）　京都下京三條猪大宮　其社
▲愛國婦人（七一）　麴町牛ヶ淵　愛國婦人會
▲法律新聞（二六〇）　日本橋本銀町　其社
▲婦女新聞（二四一九）　牛込東五軒町　其社
▲經濟新聞（十五）　日本橋蠣殼町　其社
▲家庭週報（十七）　小石川目白臺　女子大學
▲七人（四）　小石川宮下町五　其發行所

小說　良人の自白　木下尚江著△價卅五錢

◉帝國文學批評

前略…『良人の自白』は確かに人生を寫して居つた、『良人の自白』の著者は社會主義が「人生」の一手段であッて、「人生」の全體でないと云ふ事を確かに知つて居つた……中學時代に「革命」と云ふ事を知つた白井俊三、大學を卒業して恩賜の時計を何とも思はなかつた白井俊三、其俊三が病母の淚に負けて、小作人に殘酷な伯父の我儘娘を妻にする、これが人生だ、生るゝより地主の暴逆をしみじみと身に覺えた野間與三、其地主の養子俊三が心よりの同情をも斥けて嘲笑ふ程にひがんだ野間與三、其與三が獄中に辨天お玉を見てしよりうら優しくも思を焦す、これが人生だ、『良人の自白』は最早「道具」として取扱ふべきでは無い、まさに一個の「美術品」として取扱ふべきである

發行所　東京市麴町區有樂町三の一　平民社

平民文庫出版廣告

- 社會主義入門 平民社同人編 定價十錢 ▲第四版發行▼
- 消費組合の話 石川旭山著 定價十二錢 ▲再版發行▼
- 地上の理想國 瑞西 安部磯雄著 定價十五錢
- 社會民主黨建設者 ラサール 幸徳秋水著 定價十五錢
- 土地國有論 西川光次郎著 定價十錢
- 富の壓制 西川光次郎著 定價十錢 ▲再版發行▼
- マルクス 西川光次郎著 定價十錢
- 經濟進化論 田添鐵二著 定價十五錢
- 小説 火の柱 木下尚江著 定價卅五錢 ▲第六版發行▼
- 小説 良人の自白 木下尚江著 定價金卅五錢 ▲再版發行▼

五錢本の部

- 百年後の新社會 堺枯川抄譯 價五錢郵税二錢 ▲第三版發行▼
- 理想鄕 堺枯川抄譯 價五錢郵税二錢

發行所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社

婦女新聞 (週刊)毎月曜發行

定價一部三錢▲三ケ月前金三十七錢▲半年前金七十二錢▲全國郵税▲郵券代用一割増

△第二百四十九號(二月十三日發行)重要目次

- あゝ孤兒院……社説
- 妻の呼び方……家庭子
- あゝ吾等看病……山つゆ子
- 婦人と政治運動……下中芳岳
- 婦人と海事……肝付兼行氏談
- 良妻賢母……林吾一氏演説
- 乙女椿(懸賞小說第一等)……桂飛桃子

其他新報欄子供欄文苑欄戰爭週報等例に依て材料豐富▲本紙をよまざる婦人は時勢に後るゝの悔あらん

發行所 東京市牛込區五軒町 婦女新聞社

月刊雜誌 廿世紀婦人

▲毎月一回(一日)發行▲

▲二月一日發行 目次左の如し

カルタ會(今井歌子)▲婦人問題(老式部)▲日本婦人の社會上置位(三輪田元道)▲軍人遺族慰問に關する私見(嶺南生)▲新なる婦人の使命(白萩子)▲日本婦人の典型(衣通姫)(朔風生)▲性慾論(堺枯川)▲同情(川村春子)等小說には、侯爵婦人(クラスト著、志田素琴譯)其他白山小集會、文林、雜錄通信等也

▲一部金拾錢(郵税共) 六冊前金五拾五錢

發行所 東京麹町區飯田町五丁目卅七 廿世紀婦人社

外科皮膚病梅毒外科的婦人科尿道痳痔器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際出雲橋 加藤病院 電話新橋二〇三一

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺 火木土自午後三時至六時 小田原海岸 毎月曜午前中

活版印刷

東京築地 株式會社 國光社

電話新橋二六九三番 特電話八八番

趣味の無盡藏 新公論

日本全國有力なる雜誌三百餘種より毎號前一個月間の重なる思潮を摘掙し拔萃す本誌一册を讀めば現代思潮界の全景一目の下に瞭然又多數の雜誌を見るの要無し

日本最健の思潮に浴せんと欲する人は本誌を讀まざる可らず

世界最新の大勢を知らんと欲する人は本誌を讀まざる可らず

一册十二錢▲郵税共▲六册(半年分)七拾錢▲一年前金郵税共一圓四十錢▲發行所東京本鄕四丁目五番地新公論社

獨立評論

主筆山路愛山

▲毎月一回三日發行▼

●第一號(二月一日)發行●

目次

- 東京市政論
- 社會主義評論
- ●現代思想史に於ける基督教の位置(其の二)等なり、

ライオンはみがき

痳病せうかち根治神劑 快痳丸

本劑は一等軍醫正草刈先生の處方に據り藥劑師田所繁松調製せし者にて輕きは一週間如何なる難症にても一ケ月にて根治せしむる特効保證の神劑なり

藥價 三日分十五錢 七日分三十錢 ●十五日分六十錢 ●一月分一圓

東京市中は即刻配達す●全國無料逐達す

發賣 神田區皆川町一番地 電話本局三千四十番 一志堂藥局

家庭雜誌

第三卷第二號(二月二日發行)

▲家族數制限問題(在米、金子喜一)▲家庭者の覺悟(安藤兎毛喜)▲日本女性の同情心(西村渚山)▲スープの話(綠亭主人)▲善きオヂサン(堺枯川)▲内氣なる妻(渚山)▲初春の草花―梅の植込方―椿の移植法―寒葵(園藝欄)▲婦人の政治的要求―義理―子の結婚(讀者顧問欄)▲女學校の制裁(參觀者)(石川桑大郎)▲此他例に依て記事豐富、皆な本誌の特色を發揮せしむ

定價●一册六錢●六册(半年分)三十二錢●十二册六十錢●郵税不要●見本は郵券六錢

發行所 東京麹町區中六番町十番地 由分社

涙紅醫院

男女生殖器病專門 内科外科 涙紅醫院 東京神田連雀町十八 院長 醫士一瀬鷹一 電車萬世橋下

診察無料藥術料任意

愛生醫院

- ●神經衰弱 遺精早漏陰萎勃起力記臆力衰退手淫の害
- ●陰莖包皮無痛 速治療法
- ●梅毒●りん病●痔疾
- ●婦人科●せうかち●子宮病●血の道●月經不順

●地方患者は返信料添へ申込む可し

東京市神田區西今川町三番地 愛生醫院

聖書講義録

隔月發行 毎號菊判百頁内外

聖書が世界最大の文學にして最高の經典たるは今云ふを待たず、其習信徒と求道者は勿論、苟も道德宗敎の事に志あるものは、聖書を座右にせざるもの殆んど之れなきの今日、憾むらくは之が指針となりて其啓導たるもの乏しきを、我等微力を顧ず其缺乏の一部を充さんが爲め同志相謀り茲に本誌を發行す、其内容の如何は今呶々せず、左の目次により其一斑を推想せらるべし

▲一月二十五日第一號發行▼

- 基督傳 原田助
- 約翰傳講義 宮川經輝
- 舊約全書總論 牧野虎次
- 以賽亞書講義 日野眞澄
- 箴言講義 湯淺吉郎

外に雜錄欄には諸大家の聖書研究法耶蘇の新格言、ハムラバイの法典、日曜學校課程等あり

定價 一部 前金拾八錢外に郵税貳錢 一年分(六部)前金八拾八錢外に郵税拾貳錢

(注意)前金に非れば一切發送せず

發行所 大阪中ノ島五丁目 基督教世界社

書籍取次販賣(▲郵税無料▲)

- 社會問題解釋法(安部磯雄著) 一圓廿錢
- 社會主義神髓(幸徳秋水著) 三十錢
- 廿世紀之怪物 帝國主義(同上) 廿五錢
- 百年後の社會(平井廣五郎譯) 六十錢
- 小說 勞働問題(堺枯川譯) 卅五錢
- 社會主義概評(島田三郎著) 三十錢
- 社會黨(西川光次郎著) 十五錢
- カール、マルクス(同上) 十錢
- 破帝國主義論(山口義三著) 廿五錢
- 産業組合手引(森近運平編) 二十錢
- 青年と生存競爭(安藤兎毛喜著) 二十錢
- 家庭の新風味(堺枯川著) 一圓
- 家庭夜話(同上) 一圓
- 枯川隨筆(同上) 二十錢
- 我家の犬猫(同上) 八錢
- 我宗敎(トルストイ著 加藤直士譯) 七十錢
- トルストイ翁 日露戰爭論(平民社譯) 八錢

取次所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社

▲本紙定價 一部三錢五厘、廿部前金六十五錢 五十部前金一圓六十錢、郵税不要
▲廣告料 一行十九字詰三十錢
▲注文 は總べて前金に限る
▲郵券代用 にて御送金の場合は必ず一割増とし成るべく五厘の切手を用ひられたし

發行兼編輯人 原眞一郎
印刷人 山田金市郎
發行所 東京府荏原郡入新井村字新井宿二五五七番地 直行社
發賣所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
印刷所 東京築地二丁目三十一番地 株式會社國光社 電話新橋特八八、新橋二六九三番

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY